

学生が見た「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」の実践

立教大学文学部教育学科河野ゼミ有志

1. はじめに

私たちは JST-RISTEX の受託研究プロジェクト「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」(研究代表者：河野哲也) の活動として、気仙地域をはじめとした各地で教育活動を行ってきました。本稿では、私たちのプロジェクトの紹介と、これまで行ってきた活動を紹介していきます。本稿を通じて、私たちの行っている活動に少しでも興味をもっていただけたら嬉しいです。

2. RISTEX プロジェクトについて

2-1 RISTEX について

国立研究開発法人 科学技術振興機構 (JST) の一組織である社会技術研究開発センター (RISTEX) は、二十一世紀の人類・社会が直面する重要な問題 (環境・エネルギー、少子高齢化、安全安心、医療・介護など) を解決するために役立つ成果を創り出すことを目指して研究開発・支援を行っている機構です。その研究開発から生み出される成果や技術を、社会で実際に有効に活用できるものとして還元することにより、人々の生活を幸福で豊かにすることを目指しています。

RISTEX では、現在もさまざま

なプロジェクトが進行されています。その中で私たちが参加しているのは「持続可能な多世代共創社会のデザイン」の領域です。現在の日本では、人口減少・少子高齢化・財政赤字・気候変動などの問題に直面しており、多面的な「持続可能性」が大きな課題となっています。こうした課題に向き合うべく、この領域では子どもから高齢者まで多世代・多様な人々が活躍するとともに、将来世代も見据えた都市・地域を、世代を超えて共にデザインしていく研究開発を行っています。

RISTEX が目指す持続可能な多世代共創社会の実現に向けて、ここでは主に三つの目標を掲げています。一つ目は持続可能な都市・地域のデザイン提示、二つ目は多世代共創を促す仕組みづくり、そして三つ目は統合的な成果の社会実装に向けたネットワーク構築です。私たちはこの三つの目標を元に「多

世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」を行っています。

2-2 「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」について

続いて、私たちが行っている「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」について具体的に説明します。(図1参照)

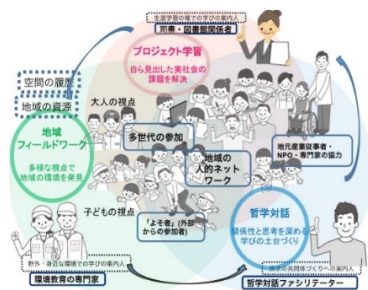
このプロジェクトでは、主に地域の学校、図書館、研究機関が連携し、「哲学対話」を子どもを交えて実施しています。まず地域フィールドワークを通して、多様な視点で実施地域の環境を発見します。地域フィールドワークとは、地域の大人たち、例えば地域の教員、NPO、住民の助けを得て、子どもたちの自然や歴史への理解を促す活動です。具体的には、体験的にその地域の自然に触れ、大人た

ちに地域の自然と接した体験を聞くエコツアーや、地域の歴史や文化を体験的に地域の大人たちから学ぶヒストリーツアーを行っています。こうして子ども達は、大人との多代的な交流から、そして自然と歴史文化の両面からその地域を学んでいきます。

こうした地域フィールドワークのあとに、そこでの経験と地域の学校や図書館、学校、児童館、科学館などの施設で調べたことを基にしながら、自分たちの地域が抱える問題や今後で育てていくべき基本的価値、さらにその地域に住み続けたいくなるような将来のビジョンについて、哲学対話の方法を使って、じっくりと議論していきます。

以上のように、「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」は、多世代の参加により、大人の視点

と子どもの視点が合わさり、先入観にとらわれない相互理解や価値創出、合意形成をするための手法です。私たちはこのプロジェクトにその地域の人たちの価値観を揺さぶり、地方創生を促す存在ともなりうるような、「よそ者」として参加し、プロジェクト進行のサポートを行ってきました。



(図 1)

3. これまでの実績

このプロジェクトでは2016年の9月から2018年の3月まで、計14回、7つの地域で活動を行いました。本稿は岩手県と宮城県での実践に焦点をあてていますが、他にも高知県や沖縄県で

実践の扉

も実践を行ってきました。詳細は以下の表を参照ください。

2016年	10月	気仙沼市
	12月	盛岡市
2017年	1月	陸前高田市
	2月	沖縄県
	3月	山田町・陸前高田市
	3月	気仙沼市
	4月	山田町・盛岡市
	6月	山田町・盛岡市
	7月	気仙沼市
2018年	8月	山田町
	9月	沖縄県
	9月	高知県
	2月	気仙沼市
	3月	沖縄県

4. 実践報告

① 陸前高田での実践

(2017.6)

初めに2017年の6月に陸前高田で行った実践（陸前高田てつがく探検隊）を紹介します。地域フィールドワークでは気仙大工左官伝承館にて、気仙大工の方を講師にお迎えしてこの地域での伝統である気仙大工について学びました。気仙大工とは気仙地域の大工の呼称で、日本四大名工に数え

られるほど伝統のある文化の一つです。

伝承館でお話しを伺った後、昔の気仙大工が使っていた道具を保管した蔵を見学し、現代の道具とは大分異なる昔の道具について学びました。最後に、気仙大工が手掛けた寺に足を運び、住職から寺の紹介と歴史を聞きました。子どもたちは学校の課外授業などで伝承館を訪れたことがあるようでしたが、気仙大工のことはあまり知っておらず興味津々の様子で話を聞いたり質問をしていたりしていました。

地域フィールドワークの後、グローバルキャンパスにて、子どもと学生とで哲学対話を行いました。この時は「今と昔での家や道具の違い」をテーマに対話を行いました。昔あった便利なものが今はなくなってい

ることに関心をもった子ども
の発言をきっかけに、より
便利でありたいという願
望から昔のものが新しいも
のに取って代わられている
のではないかと考えていま
した。そこから、新しいも
のを作っていくことは本当
によいことなのか？という
問いが生まれ、それぞれ考
えて意見出し合っていました。



② 山田町での実践 (2017.6)

長崎Ⅱ遺跡にて環境フィー
ルドワーク「発掘された山
田」を実施しました。陸前
高田市役所の担当者の方か
ら遺跡の年代や当時の人た
ちの暮らしについてより説

明をうけたのちに遺跡を散
策しました。遺跡を実際
に見学した後は山田町図書
館にて遺跡調査の方法につ
いて、その際に使う道具を
実際に手に取りながら説明
を受けました。

昼食後、子どもと大人で
グループ分けをし、哲学対
話を行いました。問いは
「才能とは何か」、「生き
がいについて」でした。

子どもたちは、遺跡それ
自体よりもむしろ遺跡をみ
つける調査員の技術に驚き
と関心を示していました。
彼らは一見違いがわから
ない地面を見てどうして遺
跡をみつけることができる
のだろうという疑問から、
それは一種の才能で、私た
ちには到底できないことでは
ないかという話になりました。
そこから、そもそも才能
ってなんだろう？という
疑問に至り、その日の対話

のテーマを「才能とはなにか」に決まりました。

大人は、翌日に岩手県立図書館で「生きがいについて」で哲学対話を行うことを聞き、私たちもそれを行いたいという意見が多く出てきました。したがって大人グループはフィールドワークとは直接関連するものではないが、「生きがいについて」で対話を行うこととなりました。



③ 気仙沼での実践 (2017. 7)

2017年7月の気仙沼での実践(第2回気仙沼てつがく探検隊)は2日間にわたって行われました。

まず1日目の環境フィールドワークでは地元の川であ

る八瀬川に入り、カエルや川魚をはじめとする水辺に生息する生物や植物を捕まえて観察しました。そして捕まえた生物や植物について、気仙沼市立図書館より選定していただいた資料をもとに調べました。夕食には地域の農家の方たちに提供していただいた肉や野菜を使い、カレーライスを作りました。また、まつぼっくりや木の枝などを炭にする「花炭づくり」を体験しました。夜は旧月立小学校の体育館内にテントを建てて就寝しました。



2日目には就寝した体育館内で哲学対話を行いました。最初に体験学習の感想

を聞くと、「生き物の大切さを感じた」「学校の授業では川に入ったことがあったが、プライベートでは入ったことがなかったので、新鮮だった」「自然と人間の距離感に違和感を感じた」といった感想が聞かれました。主に二つ目の感想から、前半の対話では「学校の授業で川に入ることと、プライベートで川に入ることには、どのような違いがあるか」という問いに話題が集中しました。休憩をはさんで再びテーマを決め直し、後半は「自然と人間の距離感」についての話が中心となりました。山の斜面に生えている草を抜くことと人間が育てたジャガイモやニンジンなどを抜いて食べることに、おなじ生き物でも何らかの線引きをしているのではないかという意見が出ました。ま

た、生えている草を抜いてしまうことは自然を大切にしていないことではないのか、自然を大切にするとはどういうことか、といった問いに対して、取りすぎは良くないけれど食べるために生き物を頂くことはやってもいいこと、自然から恩恵を受けているお礼の気持ちを表すためのキーフレーズとして「自然を大切にする」という言葉が使われているといった意見が出ました。また、人間は自然に含まれているのか、人間だけが自然と人間を区別しているのではないかといった話し合いも行われました。

5. 考察

① うまくいっている点

本プロジェクトの実践でうまくいっている点は、対話の内容が特徴的であること、大学生が「よそ者」と

して対話に参加することの2点であると考えます。

第一に、対話の内容が特徴的である、という点についてです。哲学対話を教室や図書館で単発で行う場合、参加者がそれぞれにそのとき気になっていること、抱いている疑問をもとにテーマを決めるのが通例です。しかし、ここで紹介している実践では、体験学習を通して対話を行うことで、実際に体験学習で体験したことに基づく問いや意見が出されています。例えば、2017年6月に行った陸前高田での実践において、フィールドワークで気



仙沼大工左官伝承館にて家のつくりを見て、気仙大工について学んだ後に対話を行いました。その対話では「昔の家のつくりをどうして今はしないの?」「どうして藁で屋根ができているのか?」といった問いが出てきました。これらの問いはフィールドワークで学んだからこそ出てきた問いであり、フィールドワークと哲学対話での問い出しが密接に関連づいていると考えられます。

第二に、私たち大学生は実践に参加している現地の人々にとって「よそ者」として体験に参加しています。「よそ者」が機能した例として陸前高田での岩手大学と立教大学の学生同士の哲学対話があります。ここではその場の問いと直接関係しないものの「岩手の人」「東京の者」といった

言葉が出ていました。ここから、参加していた人々は地方で暮らす人と首都圏で暮らす人の考え方の前提に違いがあることを認識していたのではないかと考えます。また、2017年7月の気仙沼での対話では、「よそ者」が関東の自然環境と気仙沼の自然環境の違いについて対比して語る場面がありました。例えば、東京には簡単に入れる川がなく、コンクリートで固められていない気仙沼の川で楽しく時間を過ごすことができたこと、首都圏のコンクリートで固められた川には生き物がいないことに対して気仙沼の川では魚が簡単に捕まえられたことなどに言及していました。こうした発言は、「よそ者」である東京から来た学生が自分の身近な場所と気仙沼とを比べることで子どもたちに

現地の人とは違う視点を提供していました。「よそ者」が現地の人と異なる視点を提供することは、対話を通して現地の人々の前提を問う、という点につながっていると考えます。

② うまくいっていない点

実践をしていくなかでうまくいっていないと思えてしまう点もありました。それは、対話の内容が部分的に学校的になっているということについてです。

ここでいうところの「学校的である」とは、子どもから発せられる言葉が学校教育のなかで伝達されるような、規範的、道徳的な言葉であり、かつそうした言葉が子どもたち自身のもつ語彙によって語られるのではなく学校で教わったものをそのまま用いている状態を意味しています。ここで注意していた

だきたい点として、私たちは学校で伝達される道徳規範それ自体が悪いものであるとは考えていません。私たちが「学校的である」として問題視していることは、子どもたちはそうした道徳規範を自分たちで考え、自分たち自身の言葉で語っていないということです。後述しますが、私たちは自分で考え、自分の言葉で主張をしてほしいと考えています。そうではなく、普段用いているような言葉をそのまま使うことによって思考が停止している状態になっている様子を感じ取りました。そうした意味で彼らが「学校的」であり、うまくいっていないと考えます。

そして、子どもたちが「学校的」となっている要因の一つとして、子どもたち自身が「良い子」的な発言を期待されていると思っていたのではないかということが考え

られます。

実際の対話のシーンを追いながら説明します。まず、逆に子どもが学校的になっていない、うまくいっていると感じた例を紹介します。3月に行った陸前高田の実践では、「お茶は機械で作った方が楽だし美味しい」という問いで対話を行いました。対話の最後に感想を言い合うシーンで「手作りのお茶には愛情がこもっていてそれはそれで良いと思うけれど、自分は、お茶は手で作るより機械に任せた方が楽でおいしく飲めると思うので機械で作った方がいいと思った。」という感想が述べられました。このことから、例えば学校で教わる手作りは良い、愛情があるものはよいものといった価値にとらわれることなく、子どもが自分の経験から自分なりの意見を出せていることがうかがえます。

つまり、子どもがお茶づくりの見学というフィールドワークを通して感じたことを対話の中で、自分の経験に基づき、自分の言葉で語ることができていたのです。

次に、子どもの対話が学校的になっている、うまくいっていない例を紹介します。7月の気仙沼の実践では、対話が終わった後、子ども達にアンケートを取り、対話の感想を書いてもらいました。アンケートより、3つ一部抜粋して紹介します。なお、学校的であったと考えられる箇所には下線部を引いています。

・「自然のことや生命のことを学んで考えさせられたものなど色々あったけど、たくさんさんの意見を参考に日々の日常生活に活かしていきたいと思ったし、自然をはかいしないようにしていきたい。食べ物とかも感謝して食べていきたいし、自然のものと

そうでないものの関係なく同じとらえ方でとらえていきたい。」

・「今回”自然”についてみんなまで話してあらためて”自然”の大切さを学びました。”人間も自然かもしれない”とか、いろいろな意見があり、私的の結論は、”自然を大切にしよう”でした。人間は自然に生かしてもらってるんじゃないかと思いました。自然がなかったら人間生きられないということがわかりました。今日自然の大切さを学んだことを忘れずに、自然に感謝して生きていきたいと思います。」

・「(...)私は「てつがくたんけんたい」に参加して本当にしたのしかつたし、良かったです。ここで学んだ事を生活に生かしたいと思います。」

上記3つの感想は、「自然を大切にし守らなければならない」という、学校で教わる規範の反復になっていると

思われます。このような感想が複数人から出された原因として考えられることは、まず、対話を行なった場所が学校の体育館であったということです。また、感想の聞き方にも原因があると考えられます。1泊2日の最終日にまとめのような形で行われた哲学対話の後、紙を配り、感想を書いてもらいました。場所や進め方が原因で、参加した子どもたちには7月の気仙沼の実践は小学校で行うサマーキャンプや林間学校のように見えたかもしれません。つまり、私たちが一見、学校的とも捉えられるプログラムを提供してしまったということも考えられるのです。

また、同7月の気仙沼の実践で、対話の終わりに一人一言ずつ感想を話す場面では、「団結力が深まった」「絆が深まった」「ここで学んだこ

とを生活に生かしていきたい」と学校のまとめに出てくるような感想が続出しました。このプログラムは子どもがその場ですぐに成長することを目的にしていません。また、子ども達に「良い子」であることを期待していません。逆に、既存の価値観を疑い、自分の経験から思考し、それを自分の言葉で語ることを期待しています。子ども達が語った学校的な言葉は、私たちが「それってどういうこと？」と、改めて問い直せばその言葉に込められた、子どもが感じたことが子ども自らの言葉で語られるのかもしれませんが。そういった意味では、7月の気仙沼の実践においては、対話の深まりが不足していたと言えます。学校的なものから子ども達を解放するために子ども達にどうアプローチし、揺さぶりをかけていくかということ

が課題です。

私たちは、プロジェクトを通して子どもたち学校で学んできたことを問い直して、自分自身の言葉を使って自分の主張をしてほしいと望んでいます。しかし、その一方でこのプロジェクト自体が学校的な成長を求める教育プロジェクトとしての側面をもっているものであるとの指摘があります。このような教育プロジェクトを通してでは子どもの学校的でない姿勢は創出できないのでしょうか。いや、決してそのようなことはないと考えます。私たちが子どもたちとともに自然体験をしたり対話のファシリテーターをしたりする姿は、もしかすると先生のように見えるかもしれませんが。しかし、哲学対話や自然体験を通して私たちは子どもたちを評価しているわけではありません。大人

が何かを教え子どもは何かを教わるといった一方的な上下関係もありません。哲学対話を通して問いについて話し合う中で、私たちは互いに新たな発見をして互いに何かしらの成長をしているはずです。

子どもたちの過ごす時間の大半が学校という空間である以上、子どもたちに学校的な姿勢が身につくことは避けられないことです。そこで、私たちが学校では尋ねられないような子どもたちの核心を突くような質問を投げかけたり、学校ではなかなか体験しえないことを提供したりすることで学校では味わえない教育プロジェクトとして学校的でない姿勢や考え方を引き出していくことができるのではないのでしょうか。

6. 今後に向けて

JST-RISTEX のプロジェクト自体は 2017 年の 9 月で終了しました。しかし持続可能な地方創生教育をつくりあげるまで、私たちはこれからも活動を続けていきます。

既存の知識を問い直すことの難しさ、また果たして本当に問い直すことができるのかを判断することの難しさを痛感したのがこのプロジェクトであると感じています。学校的であるからよくない、学校的でないからよい考え方であるとひとくくりにできないことも事実です。この問題への答えは見つかっていませんが、実践を通して見えてきたこの問題に対する様々な答えがほかの実践や考えの中から見えてくればと思います。